

ま と め (総括)

横 山 浩 一

二日間の総括ということですが、頼まれますと大変苦しいねむりもできません。ようやくここまでもちこたえたということで、皆さんもお疲れであろうと思いますので、簡単に要点だけお話しいたします。

最初に、楢崎先生が趣旨説明の際に提示されたのは、まず年代の問題、名称の問題、それから土器の系譜論(あるいは画期の問題)の三つかと思います。このうち、名称の問題については、すでに説明がありましたので省略し、年代論と系譜論の中で最も重要な点についてまとめてみたいと思います。

こゝに参加された皆さんの一番の関心は、猿投窯の年代はどうであるか、という点にあるかと思います。今回は全国各地からこられていますが、その人数に地域差がありますが、これは各地出土の猿投窯灰釉陶器のパーセンテージをそのまま反映していると思います。このように年代に関心がおありかと存じますが、これをバインダーとして、絶対年代を考えたり、その地域との並行関係を決めていこうということだと思えます。そこで、東北から南へ各地域の編年作業の紹介がありましたが、やはり各地独自の編年体系の中から出てきた猿投窯灰釉陶器の年代づけには、かなりのズレがみられました。例えば東北の場合には、白鳥さんが発表されたように、D群土器に伴なう灰釉陶器がK-90の段階のものであるといえます。これは少し早すぎるのではないかという気がしますし、また関東の場合ではO-53の継続期間が長すぎるのではないかといった、色々なズレや疑問がおこっています。また、関東、東北は、独自の年代の決め手が少ないのですが、それが比較的豊富な畿内のものと較べると、また非常な違いがあり、このことは以前から問題になっている点です。平城京東三坊大路SD650Bの土器は伴出した貨銭から9世紀の早いところに位置づけられていますが、K-90と判定される灰釉陶器も沢山入っています。一方猿投窯の方では、K-90号窯(灰原)から皇宋通宝が出ているということで11世紀の初め頃に操業期間をおいています。従って両者の間には100年以上の年代差があるということで、高島忠平氏が『考古学雑誌』(57巻-1)の論文に発表されたときから問題になっています。そこで、巽さんの発表

では更にその後出た、葉師寺西僧房の資料(本書P111)——これは973年と、焼けた年代がはっきりしていますが——、更にそれに続く葉師寺の井戸の資料を援用して、東三坊大路SD650Bの年代についての考え方は変わっていないと受取ることのできる発表がありました。

このように、年代に関しては一向に解決が得られませんが、榑崎先生のご教示によると、和歌山の鳴神からK-90の灰釉陶器が淳化元宝(990年初鑄)を伴って出土しているということですので。これによれば、K-90の灰釉陶器の年代は990年以降と考えざるを得ないのではないのでしょうか。そういう状況の中で猿投窯の編年の中に新しい窯式の設定について提示がありました。古いところから、飛鳥時代末期になるI-41窯式を新設し、奈良時代ではI-25窯式を新設しています。そして最も問題になり、今回の課題に関連するのが、平安時代後半のNN-82窯式と百代寺窯式という二窯式を設定していることです。これは勿論、形式学的研究から出てきたことですが、これらは絶対年代の付与に影響をもたざるを得ないと思います。何故なら、後の新しい年代の山茶碗の出現の年代が一応確定している以上、各窯式に割りあてる年代を操作するとしたら、古い方で操作せざるを得ないのです。一方、古い方もNN-82窯式の年代が奈良に運ばれた灰釉陶器によって確定されていますので動かすことができません。従って、その間でなにか操作しなければなりません。どうしても、K-90の年代が多少押しあげられるのではないかという感じをもっています。

この点について、榑崎先生も斎藤さんも大変苦心されたことゝ思いますが、K-90の年代を10世紀に遡らせるならば、山茶碗の年代を上げるより仕方ないという難点がありました。その難点だけは、新しい二窯式の設定によって解決されたわけです。

年代の問題については以上のようにまとめることができるかと思えます。この上は、急いで結論が得られるものではないことを皆さんも感じられたことゝ思いますが、各地での出土例を整備し検討する——特に兼康さんが紹介された鴨遺跡のような絶対年代の定点が増加した上での——ことが望まれます。特に畿内とその周辺では大いに期待できると思えます。また生産地域だけでなく、生産地と消費地を含めた各地域・各時代の土器の組成を把握して、体系的に全体をおさえていくことが必要かと思えます。

もうひとつ重要な問題として、土器・陶器の問題がありますが、一切を省略して、ただひとつだけ発表を聞いて大事なことゝ思いましたのは、須恵系土器をどう考えるか、ということです。昨日榑崎さんが服部さんに出された質問(本書P158~159)は、私が“扇動”したものです。すでに明らかになっていますが、平安時代に入ると須恵器生産が衰退し窯が少なくなり、ついになくなってしまいます。それから器種別の専門化——杯だけを、あるいは碗・皿だけを焼く——がすすみます。しかもそれらの窯が小型化してゆき、例えば中村さんが発表されたような陶呂窯の三角形の窯のようなものが出現してきます。また、須恵系土器というものが出現してきます。この須恵系土器という名称は、東北歴史資料館の桑原滋郎さんが言い始めたと思えますが、そのまま同様な名称が使われるようになってきたわけです。このような諸現象を統一的に理解でき、それによって平安時代の陶器づくりの歴史の大勢を考えるのに、一つの動向を表現することができるのではないかと思います。

さて、須恵系土器というものが、赤焼をした轆轤などを使ったもので、これが須恵器の方から土師器に近づいたのか、逆に土師器の方から須恵器に近づいたのか、という点が最も問題でした。桑原さんは最初に、須恵器の方から土師器へ近づいたと、勇敢にも言われたわけですが、私はそ

れに大変敬意を表しております。はたしてそういう考え方で全国を律しうるか——東北だけでなく、全国的に概念を拡張できるか——といえますと、これまた問題があり、現状ではそこまで言うことはできません。特に、関東の轆轤土師については、色々問題があるようです。

しかし、今にして思い出しますと、畿内でも延喜通宝が納められて出土する壺は、全て焼きが軟かいのです。この土器の軟質化、特に杯をどう理解するか——これは、中村さんが述べられたように、低火度で焼くことによって失敗を少なくすることが大きな要因ではないかと思えますし、また燃料の節約ということもあったと思えます。しかし、液体を貯える水甕は軟質化するわけにはいかないで、こゝに自ら器形別の専門化がおこる、というように理解できるかと思えます。その最も極まったところに“瓦器”が成立する——そういうところに全体の筋道を理解することができるかと思えます。もっとも、全体をはっきり割り切ることはできませんので、各地域において、今後慎重に検討をして頂きたいと思えます。

ただひとつ気になりますのは、碗・皿が軟質化して、それをつくる専門の窯が現われてきますが、そうなればもう一方の液体を入れる甕をつくっていた人々は一体どうなったのか、という点ですが、この方はなお十分に追跡できておりません。播磨だけは、先ほどの伊藤さんの話にもありましたように、平安時代にそのような甕類の生産が盛んに続いているということでしたが、播磨でもって畿内全域の需要を賄っているとは思いませんので、この点をどう考えていったらよいのか、なお検討を要する課題かと存じます。

以上、私が最も大切だと考えておりました点を申しあげてみました。どうもありがとうございました。